

イデックスオイルレポート ~For a week~

2023/8/25作成 (株)新出光

【概況】<米国製造購買担当者景況指数の悪化~中国の景気回復?>

●18日、週央に米エネルギー情報局(EIA)が発表した週間在庫統計で原油在庫の大幅な取り崩しが示された。8月に入ってからサウジアラビアの自主減産が9月も継続されるとの方針などが示される中、需給逼迫観測が相場を支えている。また、米石油サービス会社ベーカー・ヒューズが18日に発表した同日までの1週間の米国内の掘削リグ稼働数が減少したことも支援要因になり相場は81.25ドルへ続伸しました。

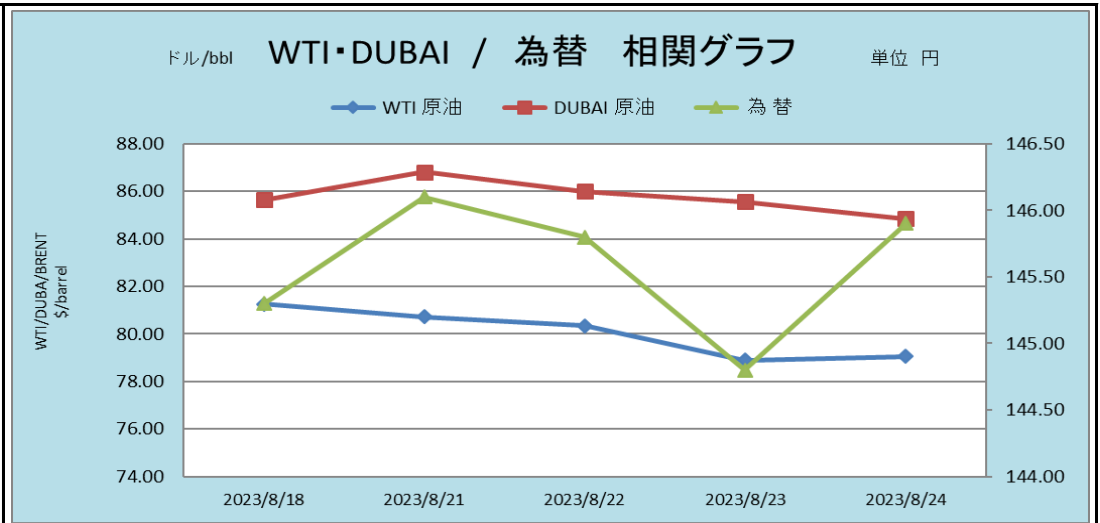
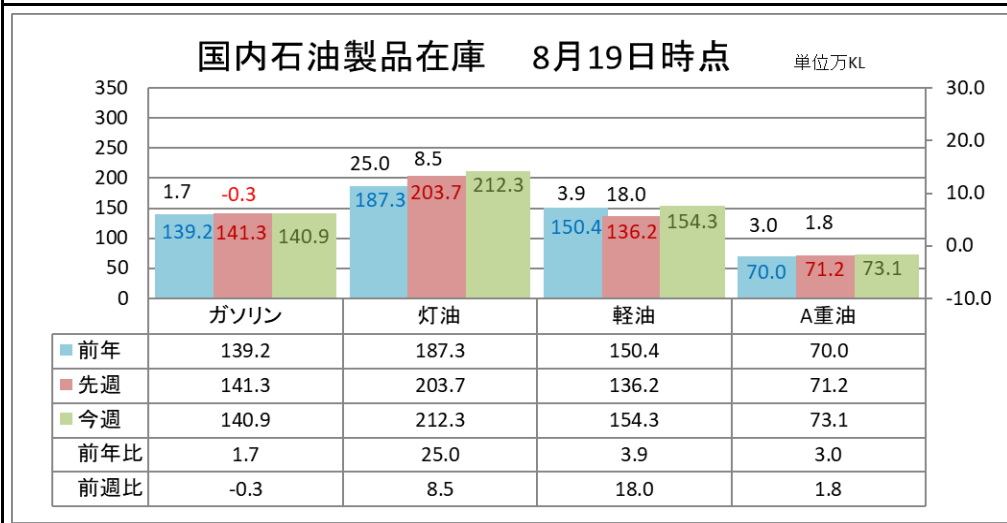
●21日、外国為替市場では、ドル安・ユーロ高地合いとなり、ドル建てで取引される原油の割安感が台頭。原油買いが先行し、相場は一時82ドル台に浮上したが、あと買いの流れは一転した。中国の景気回復を巡る懐疑的な見方や米国の追加利上げ長期化観測が広がる中、原油需要への逆風が強まるとの懸念が重しとなり、朝方の上げ幅は一掃され相場は80.72ドルへ反落しました。

●22日、9月物の納会を迎えるこの日は、終日にわたり、持ち高調整を中心とした売り買いが交錯。中国経済への懸念や米利上げ長期化観測などが引き続き相場の重しとなり、取引終盤にまとまった売りに押される展開となった。中国政府によるさらなる景気支援策への期待に反し、中国人民銀行による金利引き下げが市場予想より小幅にとどまったことなどを受け、市場の一部からは失望感も出ている。一方、根強いインフレ圧力を示す経済指標の発表などをきっかけに、米国で連邦準備制度理事会による利上げ局面が長期化するとの見方が広がっていることも原油需要減退への懸念を強めた。対ユーロでのドル上昇もドル建てで取引される商品の割高感につながり、相場は80.35ドルへ続落しました。

●23日、S&Pグローバルがこの日発表した一連の購買担当者景況指数(PMI)速報値は軒並み低調。ユーロ圏全体の総合が2年9カ月ぶり、ドイツが3年3カ月ぶり、英国が2年7カ月ぶりの低水準を記録し、石油需要の先細り懸念を背景とした売りが台頭した。その後発表された米国の総合PMIも半年ぶりの低水準に沈み、相場は一段安となり78.89ドルへ下落しました。

●24日、米労働省がこの日発表した週間新規失業保険申請件数の改善や長期金利の上昇を受け、外国為替市場でドル買いが先行。ドル建てで取引される商品の割高感から売りが優勢になった。前日発表されたユーロ圏や米国の製造業購買担当者景況指数(PMI)の悪化を受けて景気先行懸念が広がっていることも下押し材料となり、原油相場は77ドル台半ば近くまで下落する場面もあった。ただその後は、サウジアラビアなどの有力産油国による供給削減の動きへの警戒感から値を戻した。米エネルギー情報局の週間在庫統計で原油在庫が前週比610万バレル減と、市場予想の290万バレル減を上回る取り崩し幅だったことも需給が逼迫するとの観測で相場は79.05ドルへ反発しました。

8月25日 16:00現在 WTI原油 79.47ドル 為替 1ドル 147.22円



	次回元売変動予測	
	8/31~	元売変動予測
ガソリン	➡	+0.1~+0.6
灯油	➡	+0.1~+0.6
軽油	➡	+0.1~+0.6
A重油	➡	+0.1~+0.6
L S A	➡	+0.1~+0.6

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「-0.5円」、補助金は、「-10.0円・30%」、都合「+1.6円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの21日時点の小売価格平均は183.7円となっております。

《8月26日以降》次回の元売り改定は、原油コストOSP込みで、「-0.5円~±0円」、激変緩和補助金は「-9.4円・30%」の見込みで、都合「+0.1~+0.6円」の改定の予測となっております。

※原油コスト「-0.5~±0円」
 ※激変緩和補助金「-9.4円」前週比+0.6円
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】<三菱重工と日本触媒、アンモニア分解の仕組みを共同開発>

三菱重工業と日本触媒は21日、大量のアンモニアを分解して水素を取り出す仕組みを共同開発すると発表した。アンモニアの状態ですべて運搬し、工場に近い港湾などで窒素と水素に分解することを想定する。水素は化石燃料に代わるエネルギーとして期待されており、大量の水素を製造する仕組みが必要なため開発を急ぐ。

両社は7月に共同開発の契約を結んだ。三菱重工はアンモニアの製造プラントなど、国内外で化学プラントを納入してきた。日本触媒は工場の排ガスに含まれる有毒な物質を分解する触媒に強みを持つ。三菱重工は2020年代後半にアンモニアを分解する技術の商用化を目指している。両社の知見を生かすことで、効率よく大量のアンモニアを分解し水素を製造する仕組みが構築できると判断した。触媒の知見を生かしてアンモニアを高効率で分解すれば、発電用途などで使える水素の製造につながる。アンモニアは燃やしても二酸化炭素(CO2)が発生しない。水素に比べて液化する温度が高く、水素そのものを運ぶのに比べて安全かつ大量に長距離輸送することが可能とされる。工場などのエネルギー源として活用するには大量の水素が必要となる。水素のさらなる活用に向けて運搬から製造までのプロセスの構築が求められている。